

I 感染症対策の徹底について

1 児童生徒、教職員への指導について

(1) 基本的な感染症対策の実施

① 感染症対策の3つのポイント

ア 感染源を絶つ

- ・発熱等の風邪症状がみられる児童生徒は、自宅で休養（出席停止）
- ・家庭と連携した、毎朝の検温及び風邪症状の確認
- ・毎授業開始時の健康観察と記録

イ 感染経路を絶つ

- ・手洗いや咳エチケット（マスク）の徹底
- ・換気の徹底
- ・適宜消毒実施

ウ 抵抗力を高める

- ・十分な睡眠、適度な運動、バランスの取れた食事
- ・基本的生活習慣の確立

② 家庭への周知内容

- ・体調不良（発熱、咳等の風邪の症状、倦怠感がある等）の場合、登校させない。また、家族に風邪症状が見られる場合も、自宅休養する。いずれの場合も、「出席停止」として扱い「欠席」扱いにはならない。
- ・登校前に、健康観察カードを活用した検温、健康観察、体調管理を徹底する。（検温は、朝・夕に実施することが望ましい。）また、同居家族の検温等の健康管理も依頼する。
- ・登校時に健康状態が確認できない場合は、学校で（教室に入る）前に検温及び健康観察を実施する。
- ・登校後に体調不良となった場合には、速やかに迎えに来てもらう。
- ・感染が疑われる（濃厚接触者、PCR検査の対象者になる等）場合には、学校へ速やかに連絡する。
- ・外出する際にはマスクを着用し、「3密」を避けるよう徹底する。
- ・規則正しい生活リズム（早寝・早起き・朝ご飯）を守り、自ら健康管理に努める。

③ 登校後の体調管理

ア 体調不良者の早期発見

- ・体調不良者が声を上げやすい雰囲気作りを行う。
- ・教職員は、毎時間ごとに健康観察を行い、体調不良者の早期発見に努める。

イ 体調不良者への対応

- ・当該児童生徒を安全に帰宅させ、症状がなくなるまでは自宅で休養するよう指導する。
- ・帰宅するまでの間、校内では他の者との接触を可能な限り避けられるよう、

別室で待機させるなどの配慮をする。

- ・児童生徒には、体調不良者の付き添いをさせない。
- ・応急処置にあたる養護教諭・教職員は、感染に注意して対応にあたる。

(2) 集団感染リスクへの対応

① マスク着用の徹底

- ア 登下校中及び校内では、飛沫防止の観点から、原則マスクを着用させる。
- イ 特に近距離での会話や発声時には、マスクの着用を徹底させる。
- ウ 体育の授業や部活動においては、活動場面ごとに定める。
- エ 熱中症等の防止対策として、こまめに水分補給をさせる。

② 「3つの密」の回避 ※可能な限り、1つ1つの条件が発生しないよう配慮する。

- ア 密閉空間は避け、こまめに換気する。
 - ・可能な限り、2方向の窓を開放する。
 - ・エアコンの使用時も換気を行う。
 - ・環境衛生に関しては、必要に応じて学校薬剤師に相談して指示を仰ぐ。
- イ 多くの人が密集する場所を作らない。
 - ・握手や手つなぎ、ハイタッチ等の不必要な身体接触を避ける。
 - ・並び方や座席配置等を工夫し、1 m以上の間隔をあけるように努める。
 - ・学年集会などは広い場所で行い、身体的距離を確保する。
- ウ 近距離での会話や発声などの密接場面を作らない。
 - ・授業や昼食は、対面にならないようにする。
 - ・廊下や階段においての接触を避けるため、校舎内の通行方法（右側通行など）を定める。

③ 手洗いの徹底

- ア 流水と石けんによるこまめな手洗いやうがいの励行
 - ・外から教室に入る時、トイレの後、給食の前後は必ず手洗いをする。
 - ・手を拭くタオルやハンカチ等は、他人と共用しない。
 - ・必要に応じてアルコールを含んだ手指消毒液を活用する。

(3) 新型コロナウイルスに関する正しい知識の指導

- ① 児童生徒に対して、新型コロナウイルスに関する正しい知識を身に付けさせるとともに、これらの感染症対策について、児童生徒が感染のリスクを自ら判断し、これを避ける行動をとることができるよう、資料等を活用し、発達段階に応じた「正しく怖がる」指導を行う。

【参考】https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/noken/08060506_00001.htm

- ② 飛沫感染や接触感染の仕組みについて児童生徒に理解させ、手指で目、鼻、口や

着用中のマスクをできるだけ触らないよう指導する。

2 校内の環境衛生管理について

(1) 共用箇所の消毒

- ① 教室やトイレなど、特に多くの者が手を触れる箇所（ドアノブ、手すり、スイッチなど）は、1日1回以上消毒液を使用して清掃を行う。
- ② 消毒作業については、原則教職員が実施する。
- ③ 消毒用エタノールだけでなく、入手しやすい次亜塩素酸ナトリウム液も活用する。

【参考】厚生労働省及び経済産業省リーフレット

<https://www.mhlw.go.jp/content/10900000/000614437.pdf>

(2) 校舎内のゾーニング

- ① 検温等を未実施の児童生徒には健康観察を実施する。その際、専用の部屋を用意するなど工夫して実施する。
- ② 保健室の機能を維持できるよう、新型コロナウイルス感染症が疑われる児童生徒及び教職員への対応は、専用の部屋を用意する。

(3) 来校者の対応

- ① 窓口に手指用消毒液を用意し、最初に必ず使用させる。
- ② 飛沫感染防止のため、事務室等のカウンターをビニールシートで仕切る。
- ③ 氏名や時間、連絡先等を記入させ、マスク着用を促すとともに、必要最低限の滞留とさせる。

3 組織体制の整備について

- (1) 教職員で情報交換を行い、共通理解を図るとともに、緊急時の連絡体制を確認しておく。

- (2) 学校医及び学校薬剤師などと連携した管理体制を整える。

Ⅱ 学校運営上の留意点について

1 再開後の学校生活について

(1) 登下校

- ① マスクを着用して登下校させる。
 - ・マスクがない者が登校した場合の対応方法を、共通理解しておく。
- ② 下校時は、グループごとに時間帯を設定し、校門や昇降口等での密集が起こらないようにする。

(2) 各教科等の指導

- ① 全体に関する内容
 - ・朝の会や授業開始時に健康観察を実施し、健康状態を把握する。
 - ・必要な場面では、児童生徒・教職員はマスクを着用する。
 - ・共用の教材、教具、情報機器などを適切に消毒し、使用する前後で手洗いを徹底させる。
 - ・当面の間、少人数による話し合い、教え合いなどは可能な限り控える。実施する場合には、ソーシャルディスタンスを確保しながら行う。
- ② 教科指導上の留意点
 - ア 各教科等の指導については、リスクの低い学習活動に心がけ、「感染症対策を講じてもなお感染のリスクが高い学習活動」は、実施方法や時期の変更などの工夫を行う。
 - イ 感染リスクの高い学習活動の例で、「◎」は特にリスクの高いもの。
 - ◎「児童生徒が長時間、密集又は近距離で対面形式となるグループワーク等」及び「近距離で一斉に大きな声で話す活動」
 - ・理科における「児童生徒同士が近距離で活動する実験や観察」
 - ◎音楽における「室内で児童生徒が近距離で行う合唱及びリコーダーや鍵盤ハーモニカ等の管楽器演奏」
 - ・図画工作、美術における「児童生徒同士が近距離で活動する共同制作等の表現や鑑賞の活動」
 - ◎家庭、技術・家庭における「児童生徒同士が近距離で活動する調理実習」
 - ◎体育・保健体育における「児童生徒が密集する運動」や「近距離で組み合ったり接触したりする運動」
 - ウ 教材等の使用について
 - ・できるだけ個人の教材教具を使用し、児童生徒同士の貸し借りはしない。
 - ・器具や用具を共用する場合は、使用前後に消毒や手洗いを行わせる。

エ 体育授業について

- ・医療的ケア児及び基礎疾患児の場合や、保護者から感染の不安により授業への参加を控えたい旨の相談があった場合等は、授業への参加を強制せずに、児童生徒や保護者の意向を尊重する。
- ・当面の間、できるだけ屋外で実施する。ただし気温が高い日などは、熱中症に注意する。
- ・体育館など屋内で実施する場合は、特に呼気が激しくなるような運動は避ける。
- ・マスクは着用しないが、児童生徒の間隔を十分確保し、感染リスクを避ける。
- ・水泳については、今年度は実施しない。

(3) 学校給食

- ① 献立を工夫し、感染リスクを抑える。
- ② 給食当番及び配膳担当のマスクの着用・手洗いを徹底させる。
- ③ 食事は前向きで、なるべく会話を控えさせる。

(4) 休み時間

- ① 教室や廊下等の窓を開放し、十分な換気を行う。
- ② 廊下歩行のルールを守り、必要のない他の教室やフロアには行かせない。
- ③ 外から教室に入る時やトイレの後などには、石けんにより手洗いをさせる。

(5) 清掃

- ① 清掃場所は必要最低限とし、特に体調不良者が使用したトイレや部屋、密閉となる場所は清掃させない。
- ② マスクを着用し、発言をおさえて取り組ませる。
- ③ 出入口や窓を開けて行い、短時間で終了できるように工夫する。

(6) 学校行事

感染リスクが高い学校行事については、以下の対応をする。

- ① 全校集会や学年集会、文化的行事等
 - ・「3密」の回避を工夫する。徹底できない場合は実施しない。
- ② 運動会・体育祭、体育的行事等
 - ・開閉会式、競技内容、応援席を問わず、「3密」を回避するよう、運営方法を検討する。
- ③ 修学旅行、宿泊行事、校外学習等
 - ・移動車内でのマスク着用、見学や体験活動等での「3密」回避、宿泊先の住環境など、綿密な行動計画を立てる。
 - ・児童生徒や保護者の意向を尊重し、参加を強制しない。

- ・関係業者や宿泊施設等との連絡調整を行い、丁寧かつ慎重な打合せを進めておく。
- ・地域の感染状況によって、延期又は中止もあり得る。

(7) 部活動

① 活動日数と活動時間

生徒の体力等の状況を考慮して、下表のように段階的に実施する。

段 階	日 数	休日活動	活動時間	対外試合等
6月第3週(6/15～)	週3日程度	不可	60分以内	不可
6月第4週(6/22～)	週4日程度	可	90分以内	不可
6月第5週(6/29～)以降	通常	可	120分程度	可(市内限定)※

※市外との対外試合等は、当面の間実施しない。

② 活動内容等

- ・更衣や準備の時間に「3密」とならない工夫をする。
- ・身体接触を伴う運動や活動はできるだけ避ける。
- ・多数の生徒が集まり呼気が激しくなるような運動や、大声を出す活動は絶対に避ける。
- ・屋内で行う場合は窓の全開や道具の消毒等を徹底し、身体的距離を保てるように少人数での活動とする。

③ 活動計画等を事前に生徒と保護者に周知し、部活動への参加を強制しない。

④ 朝練習については、当面の間実施しない。

(8) 健康診断・身体測定

① 児童生徒定期健康診断

- ・文科省からは今年度中、可能な限り速やかに実施するように通知されている。
- ・前年度の健康診断から1年以上経過してしまうことや、臨時休業により規則正しい生活ができなかった児童生徒の健康状態が心配であることから、2学期中に健康診断を実施することが望ましい。
- ・健康診断実施延期については、事前に保護者に周知し、理解を得る。

② 身体測定

- ・身体測定等の健康診断は、学校再開以降速やかに実施する。

2 学校再開時の学校運営について【その他配慮事項】

(1) 特別な教育的支援を要する児童生徒への対応について

特別支援学級や通級指導教室に在籍する児童生徒については、変則的な時間割編成などに伴う当該児童生徒への身体的・心理的な影響に特に配慮し、当該児童生徒の実

態等を踏まえた丁寧な指導を行う。

① 教育支援プラン

- ・児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達段階等、学校の臨時休業等の状況等を十分踏まえ、教育支援プランの精査や見直しを行う。特に、新入学児童生徒について、個別の指導計画等を作成していない場合は、保護者等と連携し実態を把握し作成する。
- ・今年度は、教育支援プランの作成時の目標に対する評価を3月に行う（通常は学期ごとに行う）。
- ・作成に当たっては保護者と連携を図り、随時達成状況を伝え合うよう努める。

(2) 日本語指導を必要とする児童生徒への指導

- ・日本語指導を必要とする児童生徒については、当該児童生徒の実態等を踏まえた丁寧な日本語指導を行う。

(3) 特に配慮を要する児童生徒への対応について

- ・臨時休業や分散登校を行っている期間中であっても、虐待を受けている児童生徒をはじめとする要保護児童等、特に配慮を要する児童生徒については、校内体制を確立し組織的に対応するとともに、関係諸機関等とも十分連携する。

(4) 出欠の取扱い

- ・医療的ケアが日常的に必要であったり、基礎疾患等のある子供が感染予防のために欠席する場合や、保護者の意向により感染予防のために欠席にしたりする場合は、校長の判断により「出席停止」として扱う。

(5) 臨時休業期間中の学習評価の在り方

- ・当該期間中に家庭学習を課した内容の理解度を把握するとともに、前年度分も含め当該期間中に与えた課題に係る理解度を問うテスト等を実施する。
- ・そのテストの結果のみで評価を行うことはせず、改めてテストを実施して理解度を把握した上で、家庭学習への取組姿勢等も含めて総合的に評価を行う。

Ⅲ 授業の遅れに対する学習の保障について

1 休業期間終了後の授業の確保について

標準授業時数を結果的に満たすことができなくても、それをもって法令違反となるわけではないが、適切な学習指導を行うためには、一定の授業時数の確保が必要である。そのため、次に示す内容を踏まえて、授業時数を計画的に確保する。

(1) 教育指導計画の修正と時間割編成の工夫

(2) 学校行事及びその他の取組の見直し

(3) 長期休業の短縮による授業日数の増加

- ・令和2年度の夏季休業日は、8月8日(土)～8月23日(日)とする。
- ・令和2年度の冬季休業日は、12月26日(土)～1月5日(火)とする。
- ・授業日数の16日間増加

2 家庭学習の充実について

授業と家庭学習を関連付けて、学習内容の定着を図る。

(1) 家庭学習の充実

- ① 教科書とそれを基にした学習プリント等の教材で計画的に家庭学習を課す。
- ② 家庭学習と授業との関連を工夫し、授業計画を見直すなど、学習効果が一層上がるように工夫する。
- ③ 県立総合教育センターＨＰの「家庭学習支援サイト」を積極的に活用する。
- ④ 家庭学習の実施状況や成果を確認し、必要に応じて一人一人に支援する。

(2) ICTの活用

- ① 課題の配布や回収についてICTを積極的に活用する。
- ② 家庭の通信環境を把握し、支援する。

3 授業等における要配慮事項について

(1) 各教科の授業時数などの見直し

- ① ア～ウの新学習指導要領の基本的な考え方に基づくようにする。
ア 「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)を意識した上で、「何

を学ぶか」（指導すべき内容）を明確化し、今般の事態を受けた様々な環境変化を踏まえて「どのように学ぶか」（指導方法）を丁寧に見直す。

イ 各教科等を通じて「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」をバランスよく育成するものとする。

ウ 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導方法の工夫・改善を図ること。特に、グループ学習等が難しい場合は、調べ学習などを重点化し、「主体的な学び」と「深い学び」の充実を図る。

② 保護者に加え、地域にも丁寧に説明を行い、児童生徒の「学びの保障」に向けた取組方針について学校と共有する。

③ 児童生徒一人一人の状況を把握し、地域や家庭の協力も得て、学習効果を最大化できるようカリキュラム・マネジメントを行う。

（２）個に応じた指導の展開

① 教科指導員・学習指導員等の支援を受け、少人数指導やＴＴ指導など、授業形態の工夫を図る。

② 必要に応じて、放課後等に補充学習を実施する。

４ その他に考えられること

- ・ＩＣＴを活用した学習
- ・地域人材を活用した自主学習会
- ・社会教育施設を活用した自主学習会

Ⅳ 心のケア等に関することについて

1 心のケアについて

(1) 児童生徒の理解・心のケア

- ① 学級担任や養護教諭等を中心としてきめ細やかな健康観察等から、児童生徒の状況を的確に把握する。

自分や友達のこと、家族のことなどで不安や悩みがあるときは、一人で悩まずに相談するように促す。

- ② 心と生活に関するアンケートを早期に実施し、児童生徒が発する小さなサインを見落とさないようにし、学級担任が中心となり一人一人の児童生徒と面談を行う。

(2) 自殺予防への取組

- ① 長期休業明け直後に自殺者が増える傾向があることから、「児童生徒の自殺予防について（通知）」（入学教発第105号 令和2年4月7日付）を参照の上、教育相談体制の充実を図る。

- ② 必要に応じて児童生徒・保護者を、市教育センターの臨床心理士、スクールソーシャルワーカー、教育相談員への相談につなげる。

- ③ 必要に応じて専門家や医療機関、児童相談所、保健所、警察等の関係諸機関とも連携を密にし、児童生徒のSOSに、迅速かつ適切に対応するためのネットワークの構築に努める。

(3) 児童生徒の不登校等への対応

- ① 不登校等に対する予防的対応を図るとともに、指導の在り方や指導体制について改めて確認する。

- ② これまでに学校復帰した不登校等児童生徒が、再び不登校等になることもあるため、当該児童生徒の家庭との連携を図り、学校再開後の受入れ体制を再確認する。

(4) 相談窓口の周知

長期の臨時休業中に様々な不安やストレスを抱えていることが懸念される。学校以外の相談窓口を周知するなど、児童生徒の心のケアに配慮する。

【参考】

- ・「埼玉県内の学校に通う児童生徒の皆さんへ」（リーフレット）
～困ったり悩んだりしたら誰かに相談しよう～
- ・困ったときの相談窓口（県HP）
<https://www.prf.saitama.lg.jp/e2201/kyouikusoudan.html>
- ・「新型コロナウイルスに対する学校でのメンタルヘルス支援パッケージ」
（監修：日本児童青年精神科・診療所連絡協議会）<https://jascap.info/>
- ・24時間子供SOSダイヤル
0120-0-78310
- ・埼玉県新型コロナウイルス感染症県民サポートセンター
0570-783-770

2 感染者、濃厚接触者等への対応について

（1）感染者等に対する偏見や差別、いじめの防止

- ① 次のような差別やいじめにつながる行為は、断じて許されないという毅然とした態度で対応する。
 - ・感染者を特定しようとすることやSNS等で誤った情報を発信すること
 - ・医療、福祉従事者をはじめ、社会機能維持のために働く方々やその家族に対する感染症を理由とした偏見や差別など
- ② 新型コロナウイルス感染症に関する適切な知識を基に、児童生徒の発達段階に応じた指導をする。
- ③ 児童生徒や保護者から初期症状についての相談・連絡があった場合、丁寧に対応し、個人情報管理を徹底するとともに、罹患した場合であっても、いたずらに感染者が特定されることのないよう、十分配慮すること。
- ④ いじめが発生した場合には、通常対応と同様に組織として対応する。

（2）SNS上の書き込み等

ネット上の誹謗中傷などの掲載については、必要に応じて警察署などの関係機関に相談し、素早く対応する。

3 児童虐待への対応について

臨時休業中に支援を必要とする児童生徒において対応を行っている場合には、学校再開後の当該児童生徒の登校状況や家庭状況等について、電話や面談等で保護者及び関係

機関等との連携を図りながら、引き続き丁寧な状況把握に努める。

V 教職員の勤務・サービス、健康管理について

1 教職員の勤務・サービスについて※今後の感染症の状況等に応じて、適宜見直す。

(1) 教職員が新型コロナウイルスに感染した場合や、濃厚接触者となった場合等のサービス

- ・教職員に風邪症状がある場合
⇒出勤を自粛（特別休暇：交通遮断休暇）
- ・教職員と同居している親族等に風邪症状がある場合
⇒出勤を自粛（特別休暇：交通遮断休暇）
- ・教職員が保健所、医療機関等から新型コロナウイルス感染症の検査が必要と判断された場合（無症状の場合）
⇒出勤を自粛（職専免の承認）
- ・教職員が濃厚接触者として停留措置を受けた場合
⇒出勤不可（特別休暇：交通遮断休暇）
- ・教職員が感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律に規定する就業制限の対象になった場合
⇒出勤不可（職専免の承認）

2 教職員の健康管理について

(1) 日々の健康管理

朝夕自宅で検温し、風邪症状など自身の体調変化についての確認を行い、発熱や風邪症状がないことを確認してから出勤する。

(2) 体調不良時の対応

- ① 決して無理せず出勤を自粛し、自宅で休養する。
- ② 出勤後に発熱等体調が悪くなった場合は、すぐに管理職に報告し、他の者との接触を避け、速やかに帰宅する。

(3) 心のケア

日常的に行われる感染症対応に係る業務増加もあり、教職員のストレスも増大して

いると思われる。管理職による日頃の労いの言葉かけや、適切な指導・評価、見届けで教職員の精神的負担軽減を図ることが肝要である。併せて、気軽に周囲に相談したり、情報交換したりすることができる「風通しの良い職場環境」づくりに努める。

また、必要に応じて以下を活用する。

- ・学校における教職員の心のケア～心のケア 自己チェックリスト【教職員用】～
- ・教職員のカウンセラーによる「心の健康相談」※申込みは学事保健担当へ

VI 感染者が判明、または濃厚接触者が特定された場合の対応について

1 新型コロナウイルス感染症発生時の対応

別紙 「新型コロナウイルス感染症発生時 対応マニュアル」 参照

2 臨時休業を検討する際の判断要因

別紙 「新型コロナウイルス感染症発生時 臨時休業等基準」 参照

3 濃厚接触者を把握した場合（家族の罹患も含む）

児童生徒及び教職員の同居の家族の中に感染者がいるなど、当該児童生徒及び教職員が濃厚接触者である旨を把握した場合、感染の有無が明らかになる又は、保健所から指示のあった健康観察期間が終了するまでの間、休ませる。

4 児童生徒が出席停止となった場合の報告について

以下の表を参考に報告する。

事 由	要・不要
児童生徒自身が感染	必要
児童生徒自身が濃厚接触者	必要
児童生徒自身が風邪症状等による登校自粛（体調不良による早退含む）	必要
家庭内に体調不良者がいる場合の登校自粛	
感染不安等による登校自粛	不要

【参照】「新型コロナウイルス感染症の『指定感染症』への指定を受けたことによる『感染症及び食中毒の発生報告』について（依頼）」

（教保体第157号 令和2年4月22日付）